Ⅰ　登山者利用動態

1　はじめに

白山国立公園の利用動態については、これまで昭和50年度・51年度、昭和62年度・63年度と平成９年の３回の登山者利用動態に関する調査を実施してきた。

昭和50年度・51年度の調査では白山の自然環境を把握し、許容される人為的インパクトの限界と適正な保護と利用を図るための環境容量設定手法に関する調査として位置づけた。

昭和62年度・63年度の調査では、白山国立公園の「保護」と「利用」に関する将来的な方向付けを検討するために実施した。

平成９年度の調査では、県民総ナチュラリスト事業の一環として、国立公園利用者に対する自然解説についての意見と夏山の宿泊予約制について意見を聞くために実施した。

今回の調査では、前回の調査から５年が経過し、交通規制の浸透による変化、宿泊予約制度の実施後の変化、登山施設の改修および運用の開始により、これまでの登山者の利用動態に変化が生じていることが予想されるので実施した。すなわち、昭和62年から始めたマイカーに対する交通規制は平成５年度からは夏山の最盛期の週末を中心に、マイカーを市ノ瀬で止め、シャトルバスを運行する交通規制が開始され、現在も続いている。また、夏山シーズンには登山者が土日曜日に殺到し宿泊施設で定員を大幅に超える弊害と過剰利用を緩和するため、平成９年度からは室堂と南竜ヶ馬場の宿泊施設の予約制度を導入し、登山者の分散化と利用の平準化を図っている。さらに老朽化した室堂センターの施設や設備の改善とビジターセンター機能の充実をするため平成11年度から実施してきた改修工事が平成13年に終了し、平成14年７月から営業が再開された。この間、平成11年から13年の３年間は室堂宿泊者への食事の提供を中断していた。

これらの変化に伴い、登山者の利用動態における変化を詳細に把握し、高山帯の生態系を保全するための基礎資料として、平成13年度から３年間にわたり調査を実施した。このなかで、これまで実施されてきた登山者利用動態調査とほぼ同じ形式の調査内容は白山国立公園の利用目的、白山登山回数、登山道別の利用度、施設別の利用度、男女比、出発地別利用度、登山経験等を把握するため、宿泊施設、ビジターセンター、避難小屋にアンケート用紙を設置し、登山者に対し白山の利用動態を調査した。

聞き取り調査は、一定期間の登山者に対して全数調査を行い、登山道別利用度、登山口下山口別利用度、宿泊施設別利用度、日帰り率等を知るために平成14年度に行った。

平成15年から環境省がより正確な利用動態が把握するため、登下山者の自動カウンターを主な登山口に設置したので、本報告に引用した。

2　調査内容と調査方法

(1)　アンケート調査

所定のアンケート用紙を各避難小屋、室堂、南竜山荘、別当出合休憩舎、市ノ瀬ビジターセンターに回収箱とともに設置し、自由記入で回答してもらった。回収数は平成13年度615枚、14年度916枚、15年度789枚の合計2,320枚であった。記入場所としては、市ノ瀬が993枚と最も多く、次いで別当出合が559枚であった。

表Ⅰ－1　場所別アンケート記入数

	市ノ瀬	奥長倉	小桜平	ゴマ平	チブリ	南竜	別当出合	室堂	合計
H13	104	16	13	19	68	62	208	125	615
H14	508	9	0	33	74	62	209	21	916
H15	381	13	0	37	25	72	142	119	789
合計	993	38	13	89	167	196	559	265	2,320

(2) 聞き取り調査

平成14年８月24日から10月14日までの土日祝日の午前５時から午後５時まで、調査員２名を別当出合休憩舎に配置し、登山、下山者に対して直接聞き取り調査を行った。期間を通じて聞き取った登山者の合計は7,241人であった（表Ｉ－12)。

調査項目は、登山口、下山口、通過ルート、宿泊先、宿泊日帰りの別、グループの人数について聞き取りを行った。

3 調査結果

(1) アンケート調査

性別構成比

平成13年度に比べて平成15年度では女性の割合が13%高くなり、約半数の46%が女性で占められている。この女性の増加傾向は昭和50年、昭和62年の室堂宿泊者の性別構成比と比較しても増加傾向にあることがわかる。

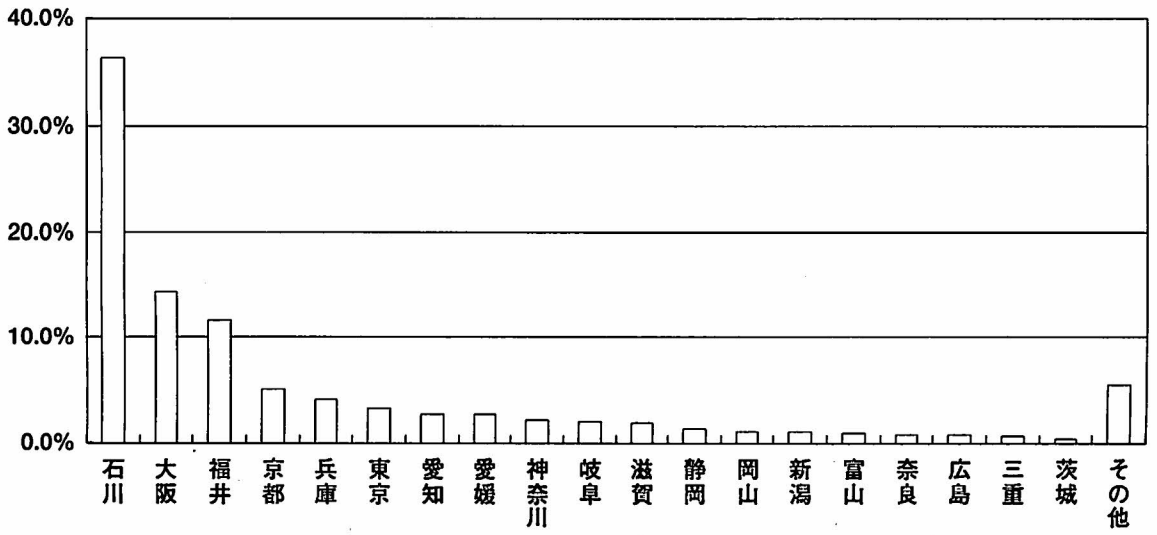
表Ｉ－2　登山者および記入者の性別構成比

	男（人）	女（人）	合計（人）	男	女	備　考
S50宿泊者	－	－	31,658	0.69%	0.31%	白山観光協会調べ
S62宿泊	－	－	29,144	0.62%	0.38%	白山観光協会調べ
S62日帰り	－	－	227	0.82%	0.19%	アンケート調査
H13	788	379	1,167	0.68%	0.32%	
H14	1,122	818	1,940	0.58%	0.42%	
H15	1,046	880	1,926	0.54%	0.46%	
合　計	2,956	2,077	5,033	0.59%	0.41%	

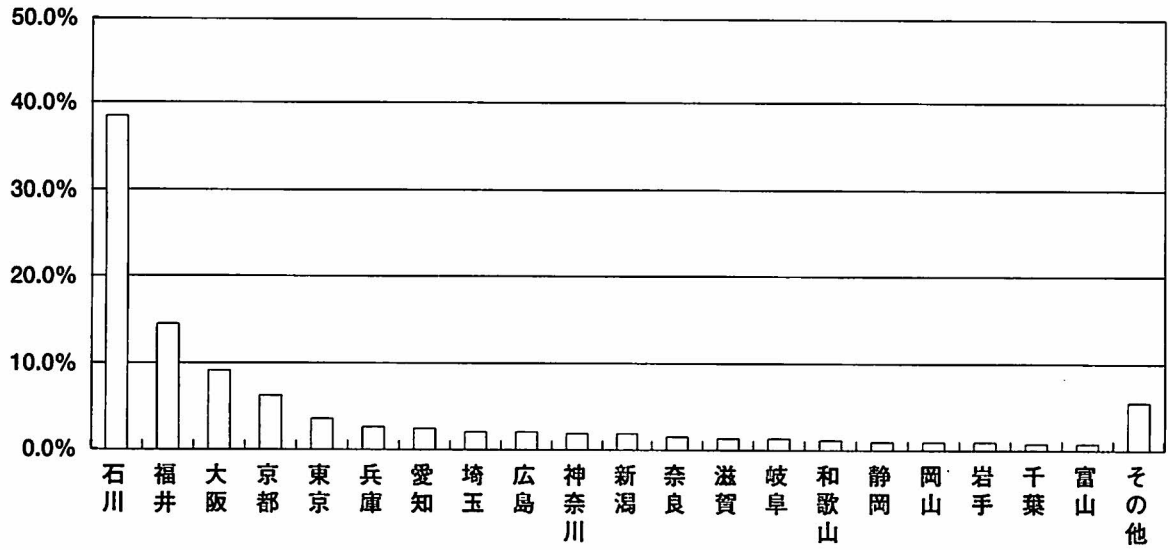
都道府県別記入者数

上位の都道府県別記入者数をグラフで示した（図Ｉ－1、図Ｉ－2、図Ｉ－3)。県外からの登山者は平成13年および平成14年６割強、平成17年は７割強となっており、隣県の福井や大阪、京都、兵庫などの関西圏、東京、愛知の３大都市圏からの登山者が上位を占めていることがうかがえる。

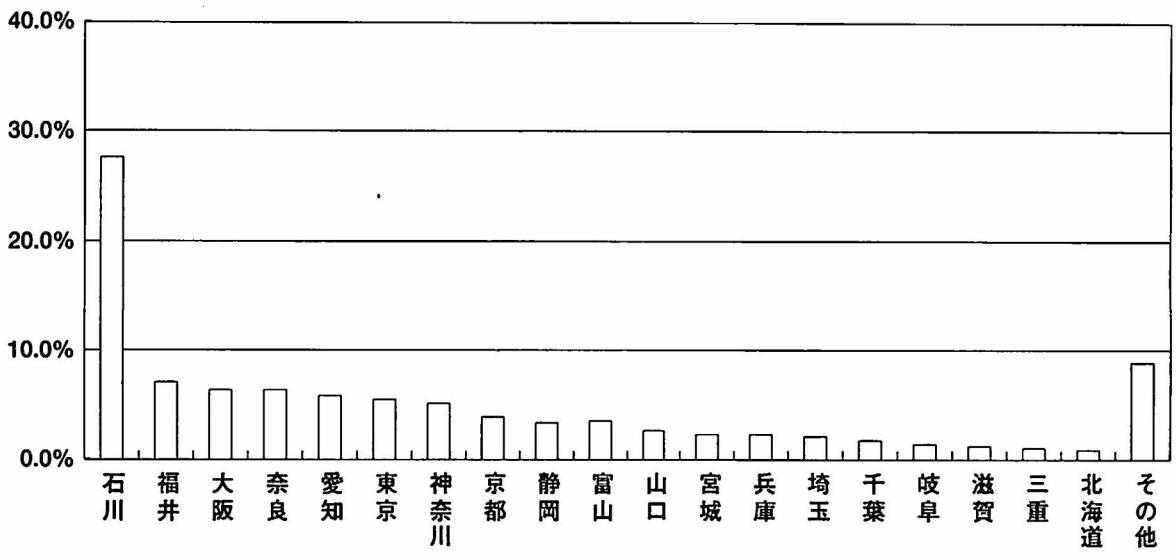
この傾向は、昭和62年の宿泊者の集計では石川県50%弱、福井県20%弱でこの両県だけで70%弱を占めていたこととくらべても、この比率が逆転し、地元県よりも遠くからの登山者が白山に来ていることが明かとなった。



図Ｉ－1　H13年都道府県別記入者数



図Ⅰ－2　H14年都道府県別記入者数



図Ⅰ－3　H15年都道府県別記入者数

団体構成

団体構成としては平成13年度は「家族」、「友人」、「単独」の順に多かったが、平成14年度は「友人」、「家族」、「その他」、「学校」の順、15年度は「友人」、「その他」、「家族」、「職場」、「単独」の順であった（表Ⅰ－3）。3年間を通してみると「友人」や「家族」で白山に訪れていることがわかった。

表Ⅰ－3　団体構成

	回答数	単独	友人	家族	職場	学校	旅行団体	その他
H13	1,046	11.9%	22.8%	24.9%	13.2%	12.7%	5.7%	8.8%
H14	1,823	9.2%	34.2%	24.4%	7.4%	10.9%	0.5%	13.4%
H15	1,789	7.0%	29.5%	19.6%	10.7%	2.5%	5.0%	25.8%

登山目的

登山目的では、山が好きという意見が圧倒的で、次いで高山植物、景色、御来光が多かった（表Ⅰ－4）。

表Ⅰ－4　登山目的

	回答数	高山植物	火山地形	地質	動物	景色	キャンプ	御来光
H13	2,296	14.0%	1.0%	0.8%	1.4%	13.7%	3.2%	10.0%
H14	3,813	18.5%	0.7%	1.0%	1.8%	10.2%	6.8%	11.0%
H15	3,742	15.8%	0.5%	1.1%	1.5%	11.8%	2.0%	9.8%
	山が好き	健康管理	白山信仰	教育	クラブ活動	旅行	その他	
H13	32.6%	9.1%	2.4%	2.7%	2.4%	2.4%	4.3%	
H14	30.2%	6.8%	1.1%	3.8%	4.5%	1.6%	1.9%	
H15	37.7%	7.8%	2.2%	2.5%	2.5%	2.6%	2.2%	

登山以外の目的

登山以外の利用目的は、自然観察、温泉利用が多かった（表Ⅰ－5）。自然観察が急激に増加しているが、これはガイドウォークをはじめとした各種自然体験プログラムや自然観察路が整備されている市ノ瀬地区での回答数が多かったためと考えられる。

平成14年に比べキャンプがH15年に落ち込んだのは天候不順が原因と考えられる。

表Ⅰ－5　登山以外の目的

	回答数	キャンプ	温泉	釣り	自然観察	ドライブ	サイクリング	その他
H13	307	15.6%	33.2%	8.8%	19.9%	18.6%	2.0%	2.0%
H14	612	33.7%	11.3%	4.6%	43.3%	6.0%	0.3%	0.8%
H15	293	13.0%	25.3%	1.7%	46.8%	9.2%	3.4%	0.7%

登山経験

登山経験は自己申告であるが、約30%弱が初心者で中級者が約60%を占めている（表Ⅰ－6）。

表Ⅰ－6　登山経験

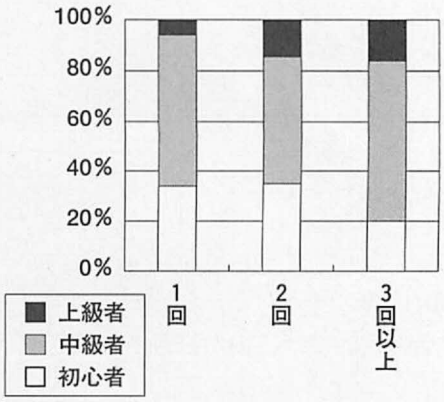
	回答数	初心者	中級者	上級者
H13	1,130	30.1%	56.4%	13.5%
H14	1,944	24.1%	65.9%	10.0%
H15	1,898	24.8%	64.3%	10.9%

白山登山経験

白山登山経験では、初めてと３回以上が約４割を占めている。３回以上の経験者の平均登山回数は20回前後である（表Ⅰ－7）。白山登山回数を登山経験別に３年間の平均で見ると図Ⅰ－4のとおりである。上級、中級ほど白山への登山回数が多く、初心者ほど少なくなる傾向がある。

表Ⅰ－7　白山登山経験

	回答数	初	２回目	３回以上	３回以上平均回数
H13	1,130	38.1%	12.7%	49.1%	18
H14	1,870	45.6%	13.5%	40.9%	21
H15	1,779	43.6%	14.7%	41.7%	15



図Ⅰ－4　登山経験別白山登山回数

利用期間

利用期間では、１泊が３年ともに60%以上を占め、日帰りは20%から14%に減っている（表Ｉ－8)。施設別に日帰り率を見ると、チブリ避難小屋利用者では３年平均で40%を超えている。平成13年は室堂センターの改修工事中のため、宿泊は可能であったが、食事の提供は出来なかった。そのため、食料や炊事器具が必要となり、これらの荷物を持参して登ることを避けた登山者が日帰りする傾向があったとも考えられる。

絶対数は極わずかであるが、この３年間で利用者が増加しているのは加賀禅定道の奥長倉避難小屋で平成15年には６割が日帰りをしている（表Ｉ－9)。

利用期間としては、このアンケートでは日帰り率は平成13年に比べ平成14、15年は減少し、１泊が増加している。

表Ｉ－8　利用期間

	回答数	日帰り	１泊	２泊	３泊以上	備考（３泊以上平均泊数）
H13	1,109	20%	62%	13%	6%	5
H14	1,912	15%	65%	15%	5%	4
H15	1,845	14%	67%	15%	4%	6
合計	4,866	15.8%	65.1%	12.5%	4.8%	

表Ｉ－9　施設別日帰り率

	全体	市ノ瀬	奥長倉	小桜平	ゴマ平	チブリ	南竜	別当出合	室堂
H13	19.9%	26.9%	13.6%	44.4%	11.8%	50.0%	9.8%	16.0%	14.1%
H14	15.1%	17.9%	25.0%	－	6.3%	29.9%	1.0%	17.0%	3.0%
H15	14.0%	18.5%	62.5%	－	0.0%	46.2%	0.0%	11.5%	6.7%
合計	16.3%	21.1%	33.7%	44.4%	6.0%	42.0%	3.6%	14.8%	7.9%

登山ガイド

登山ガイドについては、４割の人が必要と回答している（表Ｉ－10)。その場合の平均ガイド時間は、2～3時間で、時間当たりの料金は1,000円ほど、日当たりにすると6,000円前後という回答であった。

希望するガイドの内容では、植物解説を希望する人が最も多く（37.0%)、自然解説（21.2%)、コース解説（11.9%）の順で、以下動物解説（7.0%)、地形地質解説（6.1%)、歴史解説（4.9%）であった（表Ｉ－11)。

表Ｉ－10　登山ガイド

	回答数	必要	不要	時間	料金/時間	料金/日
H13	1,076	41.1%	58.9%	2	¥1,094	¥5,430
H14	1,703	39.0%	61.0%	2	¥1,221	¥7,216
H15	1,570	35.1%	64.9%	3	¥1,034	¥6,189

表Ｉ－11　希望ガイド内容

項目	H13	H14	H15	平均
植物解説	36.4%	34.2%	40.6%	37.0%
自然解説	20.9%	14.4%	28.5%	21.2%
コース解説	16.5%	13.6%	5.8%	11.9%
動物解説	2.9%	8.3%	9.9%	7.0%
地形地質解説	3.7%	7.5%	7.2%	6.1%
歴史解説	2.3%	9.1%	3.3%	4.9%
山の名・地名	4.8%	4.8%	0.6%	3.4%
登山指導	3.3%	5.1%	1.7%	3.3%

その他　施設案内、伝説開設、天文解説、危険対策等

(2) 別当出合での聞き取り調査

日帰り登山者の率

聞き取り調査結果で、日帰り登山者の割合は全登山者の40%であった。しかし、調査をおこなった時期別に分けてみると、8月では、17.7%、9月は33.7%、10月には55.4%と月のよって大きく違うことがわかった（表Ⅰ－15)。

表Ⅰ－12　調査日別聞き取り数

8月24日	693
8月31日	573
9月15日	677
9月16日	185
9月21日	889
9月22日	807
9月23日	167
9月28日	144
9月29日	101
10月5日	824
10月6日	396
10月12日	784
10月13日	732
10月14日	269
合　計	7,241

表Ⅰ－13　登山道別利用度

登山道	合計		日帰り		宿泊	
	上り	下り	上り	下り	上り	下り
砂防新道	89.2%	62.2%	84.4%	72.9%	92.4%	55.1%
観光新道	9.3%	30.6%	15.0%	23.0%	5.5%	35.7%
チブリ尾根	0.3%	2.3%	0.1%	1.8%	0.4%	2.7%
平瀬道	0.8%	1.2%	0.0%	0.0%	1.3%	2.1%
白山禅定道	0.1%	0.3%	0.1%	0.6%	0.1%	0.1%
釈迦新道	0.0%	0.5%	0.1%	0.4%	0.0%	0.6%
中宮道	0.1%	0.5%	0.0%	0.0%	0.2%	0.9%
岩間道	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
加賀禅定道	0.0%	0.4%	0.0%	0.1%	0.0%	0.7%
南縦走路	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
北縦走路	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
不明	0.2%	1.3%	0.3%	1.1%	0.0%	1.4%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表Ⅰ－14　宿泊地利用度

室堂	80.2%
南竜山荘	18.5%
ゴマ平避難小屋	0.7%
甚之助避難小屋	0.1%
奥長倉避難小屋	0.3%
チブリ尾根避難小屋	0.0%
殿ヶ池避難小屋	0.0%
大倉山避難小屋	0.0%
	100.0%

表Ⅰ－15　月別日帰り率

	宿泊	日帰り	日帰り率
8月	1,042	224	17.7%
9月	1,970	1,000	33.7%
10月	1,335	1,661	55.4%

アンケート票による調査では、日帰りは20%から15%、14%で、8月に実施した聞き取り調査による結果と近い値となった。なお、平成9年に実施した調査では、日帰り利用者の割合は11.3%であったことから、日帰り登山者が増えていることがわかる。

環境省が平成15年におこなった登山者カウンターによる調査の結果では、日帰り登山者の割合は春山シーズン（5－6月）86.7%、夏山シーズン（7－8月）は24.5%、秋山シーズン（9月－10月15日）は62.8%であった（Ⅵ参考資料)。

聞き取り調査では登山者および下山者のほぼ全員から調査を行ったのに対し、アンケート票による調査では、自由記入のため、登山行程に余裕のある宿泊登山者の方が記入する割合が多くなることも考えられた。さらに、聞き取り調査の実施時期が夏山シーズンの終盤および、秋山を対象としたために、日帰り登山者の割合が高くなったなどの結果に偏りが考えられた。

登山施設の利用

登山道の利用コースは、上りでは砂防新道89.2%、観光新道の9.3%、平瀬道の0.8%、下山コースでも砂防新道62.2%が最も多く、次いで観光新道30.6%、チブリ尾根2.3%であった。日帰りと宿泊の登山者で比べると

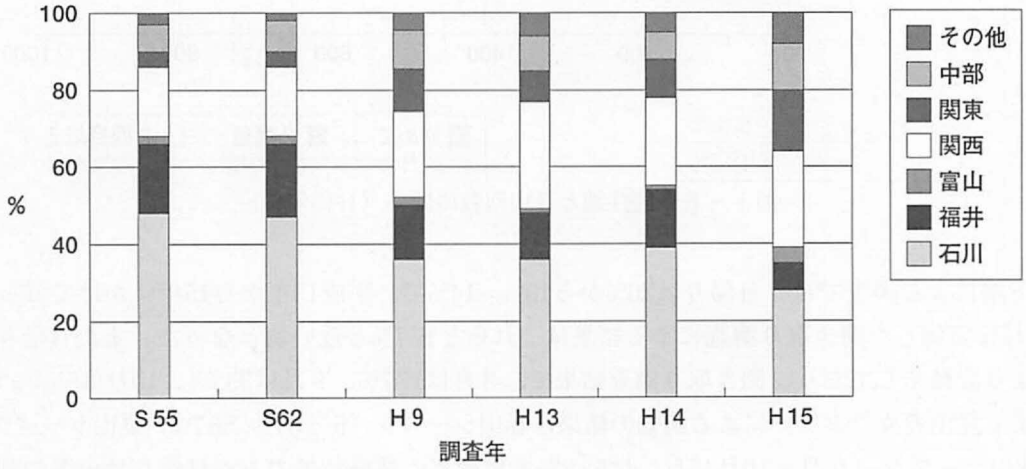
宿泊登山者の方が砂防新道を上りに利用する率が高く、宿泊登山者は92.4%が使っていたのに対し、日帰り登山者は84.4%の利用であった。一方下りコースでは日帰り登山者の方が砂防新道を使う率が高く、72.9%であったのに対し、宿泊登山者は55.1%の利用に留まった（表Ⅰ－13）。以上の結果から、宿泊者は上りに砂防新道を利用する割合が多く、下りコースには砂防新道とは別の道を選択するものが4割ほどあることがわかった。

室堂での平成14年全期間の宿泊者の名簿からの調査結果では約78%の人が砂防新道を利用し、平瀬道が11.4%、観光新道が砂防新道との重複を含め6.5%であった。これら二つの調査結果が異なるのは室堂センターと別当出合との調査地点の差、また調査期間にも差があるからであると考えられる。

宿泊地の利用度をみると室堂（80.2%）、南竜山荘（18.5%）であり、特に室堂に集中していた（表Ⅰ－14）。

4　考　察

都道府県別利用者数では、県外からの利用者が多く、県内の利用者は3－4割弱であった（図Ⅰ－5）。隣県からは福井県からの利用者が多いのに比べ、白山国立公園を擁する富山、岐阜が少なかった。これは、石川県と福井県においては白山に対する地元意識、思い入れが強いのであろう。すなわち、石川、福井両県における白山は両県最大の河川である手取川、九頭竜川の源流であり、白山はそれらの河川が潤す平野から遠望でき、信仰の対象となってきた。また、それらの平野を潤す恵みの山であり、この地域の住民にとって親しみの深い山であった。これに対し、富山、岐阜両県でも庄川や長良川の源流であり、これらの川の流域の一部の住民にとっての重要性は変わらないが、これら両県には立山、御嶽山など信仰の山を含め、剱岳、穂高岳など登山者の興味を引く山がある。また白山の場合、登山口へのアプローチなどを考えると、これらに比べて低い登山対象になるのではないかと考えられる。



図Ⅰ－5　登山者の居住地

過去3年間で常時10位以内に入っている県は、石川、福井、大阪、京都、東京、神奈川、愛知であった。石川、福井の両県をのぞけば、3大都市圏からの利用者は年々多くなりつつあり、中でも関西圏からの利用が多い。これを、過去の宿泊者の出身地別割合と比較してみると、県内登山者の割合は昭和55年、62年には地元が6割以上であったが、平成9年には5割、平成15年には4割を割るようになった。石川県の登山者だけを見ても昭和62年までは5割弱あったが、ここ3年間は3－4割弱と減っている。また、福井県登山者の割合も同様に2割弱だったものが、1割前後まで減少、している。中部地方からの登山者は横ばいないし8%増加しているのに対し、関西からの登山者の割合は18%だったものから5－10%増加し、25%前後に、また関東からは4%ほどと少なかったが、8－16%に増加し、その他の地域からも5－9%に増加している。これらは、近年の中高齢者の登山ブームに加え、百名山登山ブームもあり、百名山の一つとして著名な白山の人気が全国的になっていることを示す結果となっている。

団体構成では特に大きな変化は認められないが、単独登山者が減少傾向にあるようである。また旅行団体ツアーが増えていると言われているが、アンケートの結果のみでは増加は認められない。これは団体の場合アン

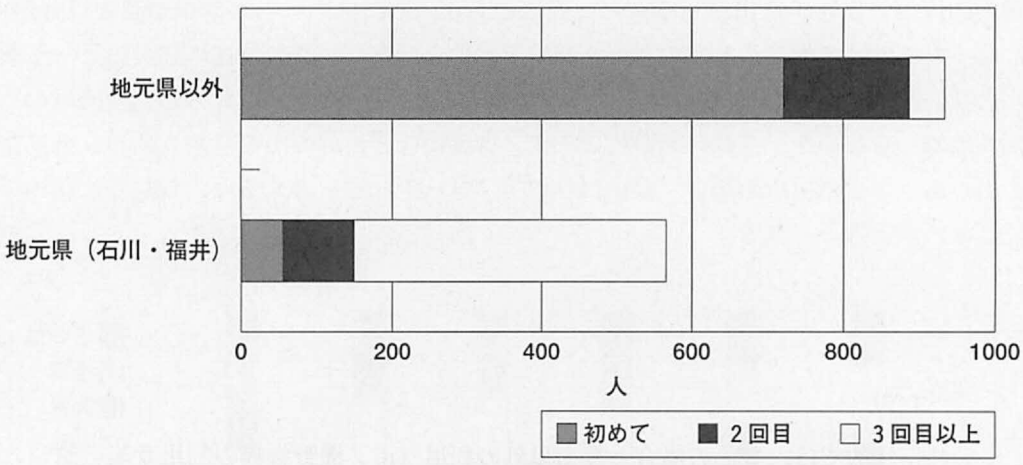
ケートの記入がしにくいためではないかと考えられる。

利用目的では、登山については大きな変化はなく、登山以外の利用目的については、「高山植物」や「ご来光」の割合が高く、利用者の白山に対するイメージを反映している。

平成14年に山と渓谷社が発行している登山雑誌の「山と渓谷１月号」の読者が選ぶ日本の山100という企画で、白山はベスト10位に選ばれている。このときの人気のポイントは、高山植物の美しさ、登りやすさ、地元の山であることで、支持層は地元石川県、福井県と女性層からの人気が高いという今回のアンケート結果と一致する結果であった。

登山経験及び白山登山経験では、表Ｉ－5から７に示すとおり中級者が約60%、初心者が30%、上級者が10%であった。

また、登山者の居住地と登山回数の関係（平成15年）を見ると、地元である石川と福井では３回以上の登山経験者の割合が最も多く、初めて白山に登る人は10%弱である。これに対し、地元以外の登山者が初めて白山にのぼる割合は77%である。すなわち地元県のものほど何度も白山に登っていることがわかる（図Ｉ－6）。



図Ｉ－６　居住地と登山回数の関係（H15年度）

アンケート票による調査では、日帰りは20%から15%、14%で、平成13年から15年にかけて減っており、平成14年に８月に実施した聞き取り調査による結果はこれらと17.7%と近い値となった。また日帰り登山者の割合は季節により変動をしており、聞き取り調査結果で、８月は17.7%、９月は33.7%、10月は55.4%であった。

環境省による登山者カウンターによる調査の結果は春山シーズン（5－6月）86.7%、夏山シーズン（7－8月）は24.5%、秋山シーズン（９月－10月15日）は62.8%と環境省の調査結果の方が日帰り登山者の割合は県が実施した聞き取り調査結果より多い。これは、調査実施年が１年ずれていることもあってどちらが正確かという判定は出来ないが、日帰り登山者の割合は夏少なく春と秋に多い傾向を示す結果となっている。

登山ガイドはアンケート記入者の約40%前後が必要と回答しており、近年旅行会社等からガイドの要請もある。潜在的には需要があるものと思われる。希望の多いガイドの内容の４割が植物解説、２割が自然解説、１割がコース案内である。これらの要望に対する現状の対応は、自然解説員研究会による自然解説が７、８月に室堂と南竜ヶ馬場を拠点に無料で実施されている。平成15年度の実績では、７月19日から８月18日までの30日間活動した。室堂では屋外での観察指導の対象者はのべ2,417名、夜や雨の日の高山植物写真のスライド上映などの屋内業務には281名、また、その他の活動としては登山ルートでの登山中の指導には269名の合計2,967名に対し解説指導を行っている。また、同様に南竜ヶ馬場では屋外業務1,135名、屋内業務1,049名、その他業務126名の合計2,310名に対し観察指導をおこなっている。

今回のアンケートでガイドに対する料金としては１時間あたり1,000円、１日あたり6,000円が平均的回答であった。現在は、石川県自然解説員研究会のボランティア活動を県が支援して解説を実施している。室堂と南竜が馬場の２か所を合計すると屋外業務だけでも、3,466名が解説指導を受けたことになり、単純に１名1,000円を負担すると仮定すると3,500千円程度の財源となる。今後受益者負担による有料化の方向やプロの自然解

説ガイドの活動についても検討される段階に来ているといえそうである。

登山道の利用度では登山下山とも砂防新道に極端に集中していた。観光新道は下山に利用されている。日帰り及び宿泊別に見ると日帰りの場合は上りに利用する率が多少高く、宿泊の場合は下山に利用する率が高いようである。

まとめ

以上の結果から、白山の登山者は、地元の石川県、福井県からの登山者は4割を占めているが、年々両県以外からの登山者が増加の傾向にあり、6割が関西、関東を中心に全国からの登山者となっている。地元登山者のうち初めて白山を訪れる登山の割合は1割程度であるが、地元以外からの登山者の7割以上は初めてであった。これらを総合すると、白山への登山者は地元の割合が減少し全国から来る人の割合が高くなり、しかも初めて登る人の割合は年々増えている。また、性別では女性の割合が高くなり、年齢では50歳以上の中高年の登山者が増えている。構成では家族、職場などの小さい団体であった。

これらの人々が白山に求めるものは、高山植物と自然を楽しみたいという人が多いと考えられる。

利用施設の利用状況を見ると、宿泊施設は室堂に8割、登山道は登りの9割と下り6割が砂防新道、下りの3割が観光新道と、極端に砂防新道に集中していた。下りのチブリ尾根、平瀬道をのぞくと、これら以外の登山道はすべて1％以下の利用率であった。

一方、極わずかではあるが奥長倉避難小屋は一里野からリフトが使用できることや、百四丈滝等の眺望もあり利用が増えているようである。またチブリ尾根避難小屋は最近のブナ林ブームで利用も増えている。

今後は、混雑を避けて白山の自然をゆっくりと探勝し、楽しめる登山コースの推奨。例えば、市ノ瀬を起点とするチブリ尾根－南竜泊－室堂泊－釈迦新道－市ノ瀬周回のように。また、それに伴う施設の整備やソフトの整備を図り、日帰り率を下げ、利用の分散化を考えながらの整備をすることも必要となるであろう。

調査にあたっての問題点

白山国立公園の利用目的では、登山の場合と登山以外の利用（市ノ瀬野営場の利用者等を想定していた）にわけて設問を設定したが、登山利用の項と登山以外の項に二重に記入した人が多かった。またアンケート用紙裏面の移入動植物の観察記録の項は、回答数が少なかった。

今後この種のアンケートを実施する場合は、設問の設定の仕方を再考しなければならない。さらに、団体の場合は代表者が一枚に記入するようにしたが、分析が困難で、これも再考しなければならない事項であった。

5　文　献

石川県公害環境部環境保全課・石川県白山自然保護センター（1976）自然公園地域環境容量設定手法研究中間報告書－白山地域ケーススタディ中間報告－．102pp.

石川県環境部環境保全課・石川県白山自然保護センター（1977）自然公園地域環境容量設定手法研究報告書－白山地域ケーススタディ－．93pp.

石川県環境部（1989）白山国立公園の保護と利用に関する報告書．95pp.

石川県白山自然保護センター（1997）白山国立公園利用調査報告書．33pp.

白山国立公園動態調査アンケート

このアンケートは、白山国立公園利用者のご意見を反映し、より良い利用方法を検討するために行うものです。ご協力をお願いいたします。【一団体（個人を含む）一枚でお願いいたします】

このアンケートの実施機関およびお問い合わせ先は
石川県白山自然保護センター　☎07619-5-5321

1　登山開始日　平成　　年　　月　　日　　天候（　　）

2　記入場所　　市ノ瀬　別当出合　南竜ヶ馬場　室堂　避難小屋（　　）

3　登山団体（個人を含む）の構成

性別　　男　　名　　女　　名　　年齢構成　　歳～　　歳
住居地都道府県名　　都道府県
団体の場合、以下にお答え下さい。
友人　家族　職場　学校　旅行団体　その他（　　）

4　利用目的

登山の場合
高山植物観察　火山地形観察・地質観察　動物観察　景色探訪　キャンプ　御来光
山が好き　健康管理　白山信仰　教育（自己啓発）　クラブ活動　旅行　その他（　　）
登山以外の場合
キャンプ　温泉利用　魚釣り（川遊び）　自然観察　ドライブ　サイクリング
その他（　　）

5　登山経験

Ａあなたの登山経験は？　　ａ初心者　ｂ中級者　ｃ上級
Ｂ白山登山の経験は　　ａ初めて　ｂ２回目　ｃ３回目以上（　　回目）

6　利用期間

ａ日帰り　ｂ１泊　ｃ２泊　ｄ３泊以上（　　泊）

7　登山ガイドについて

白山登山時に登山ガイド（自然解説を含む）が必要ですか？　（はい　いいえ）
上記で「はい」の場合
内容はどの様なものが良いでしょうか＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
ガイドの時間はどのくらいが必要でしょうか＿＿＿＿＿＿時間くらい
ガイド料金としてどのくらいが適当でしょうか　１日＿＿＿円・１時間＿＿＿円

8　白山国立公園に対してご要望・希望事項がございましたらご記入下さい。
（自然、施設、ガイド、職員について等なんでも結構です。）

≡☆ 人里植物、動物の情報を集めています。☆≡

最近白山の亜高山帯や高山帯に人里の生物が進出しています。自然界のバランスの関係からこれらの分布域を調査しています。以下の動植物を見かけたらその位置や標高、数などをできるだけ詳しくお知らせ下さい。

植物　　動物
オオバコ・シロツメクサ・フキ・スズメノカタビラ　　カラス・キツネ